

多胎児支援の方法に関する研究

名和文香 服部律子 谷口通英 堀内寛子 布原佳奈 宮本麻記子 両羽美穂子 (大学)
田口由紀子 福士せつ子 小木曾美喜江 (県立多治見病院・東1階)
桜井きよみ 日置富佐子 (多治見市保健センター)

I. はじめに

近年、急速に普及してきた体外受精や顕微授精に伴い、多胎妊娠率は増加している。1995年には、多胎分娩数は、出産千に対し8.97であったが、2004年には11.7と年々上昇している¹⁾。また、多胎妊娠は、単胎に比べて異常も多くハイリスク妊婦として厳重な管理を必要とし、周産期死亡率も高く、2004年では、双子二児ともの生存率は93.1%である²⁾。岐阜県での多胎妊娠の現状は、2004年で、双子259組、三つ子4組であり、多胎の出生率も出産千に対し13.9と、全国平均を上回っている³⁾。

さらに、多胎児の育児は非常に大変であり^{4,5)}、心身ともにストレスが高く⁶⁾、妊娠期からの不安を抱えたまま、育児期を迎える母親も多いため、母親と母親を支える家族のサポートがとても重要である。そのため、妊娠期からの多胎妊娠支援が活発に行われるようになり、多胎妊婦のニーズも高い⁷⁾。しかし、多胎分娩の数は増加しているが、地域によって取り組みが様々であるため、妊婦にとっての十分な支援にいたっていない地域もある。そこで、保健所、医療機関、多胎児サークル、研究者が集まり、交流や情報交換に取り組むことで、多職種が共同して行う支援の重要性が浮き彫りになった⁸⁾。そして、岐阜県では、今年「ぎふ多胎ネット」が発足し、多胎児の支援活動が活発に行われるようになった。本大学でも、多胎児支援方法について、地域や病院、多胎児サークルと共に連携しながら、双子のママパパ教室開催に昨年度から取り組んでいる。

II. 目的

妊娠期から育児期における、多胎児の母親とその家族に対する効果的な介入方法と、地域における多胎児支援について、多職種がどのように協働していけばよいかを考える。

III. 方法および結果

昨年度からの取り組みである双子のママパパ教室の実施および教室に関するアンケート、教室後のフォローアップのための調査を行った。

倫理的配慮として、本研究は研究倫理審査部会

の承認を受けており、対象者には、調査の趣旨の説明、参加は自由意思であり、個人は特定されないこと、データ管理について文書を用い説明した。また、同意書の提出により参加の有無を確認した。

1. 双子のママパパ教室の実施

1) 経過

多胎児サークルのネットワーク構築の取り組みとして昨年度より開催された。昨年は1回の開催であったが今年度は2回(6、12月)実施した。

2) 趣旨

教室開催の趣旨は次の3つである。

- (1) 妊娠中から、多胎児の分娩や育児など、正しい情報を得ることで、イメージを持つことができる。
- (2) 多胎妊婦同士の交流を図ることにより、情報交換や悩みなどの共有ができストレスの軽減につながる。
- (3) 多職種者やサークルが協力し、地域全体で多胎児支援を行うことによって、情報を共有でき、いろいろな角度から支援することができる。

3) 現地側の取り組み体制

双子のママパパ教室は、保健師、助産師、看護師、サークル、大学が協働して行うため、開催にあたっては相互に情報交換し計画した。教室終了後には、色々な立場から意見交換をし、現状と今後の支援について話し合うことができた。

4) 実施内容

- (1) はじめに：今回の教室の趣旨と今後の支援について紹介 (保健師)
- (2) 自己紹介：仲間作り (参加者全員)
- (3) 多胎妊娠中の日常生活の過ごし方：出産育児支援 (病棟助産師、大学服部)
- (4) 多胎の分娩と入院生活：出産育児支援 (病棟助産師、大学服部)
- (5) 育児・授乳・沐浴について：育児支援 (多胎児サークル)
- (6) 多胎児サークルの紹介と育児体験：仲間作り、パパの育児体験 (多胎児サークル)

5) 結果

(1) 参加者

多胎妊婦とその夫6組、多胎妊婦と同居祖母1組、多胎妊婦のみ5名の計18名が参加した。

(2) スタッフ

スタッフは、A 市保健師、B 病院助産師・看護師、C 市保健師、岐阜県立看護大学教員である。

(3) アンケート調査

①「教室の開催を何で知ったか」は、ほとんどの妊婦が【保健センターからのチラシ】【病院で勧められた】と回答していた。(表 1)

表 1. 教室の開催を何で知ったか (n=18)

	妊婦本人	夫	同居祖母	(人)
保健センターからのチラシ	4			
病院で勧められた	3	1		
保健センターからのチラシ	3			
および病院で勧められた				
みどふあどさんより	1			
妻に誘われた		5		
娘に誘われた			1	

②「年齢」は、30代が最も多かった。(表 2)

表 2. 年齢 (n=18)

	妊婦本人	夫	同居祖母	(人)
20代	3	1		
30代	8	5		
50代			1	

③「妊娠週数」は、12~31週であった。(表 3)

表 3. 妊娠週数 (n=11)

週数	人
12~15週	3
16~19週	2
20~23週	1
24~27週	2
28~31週	3

④「教室に参加した満足度」は、【期待通り】が 10 人、【まあまあ】が 7 人であった。(図 1)

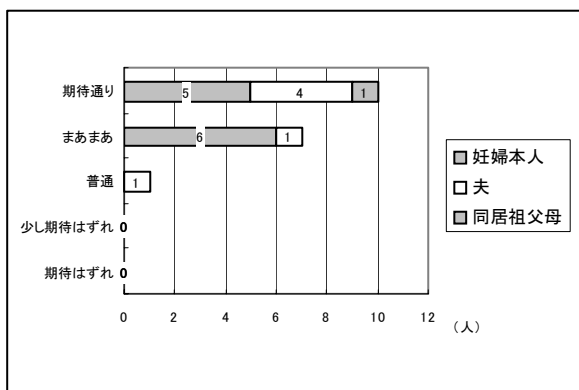


図 1. 教室に参加した満足度 (n=18)

⑤「知りたかった内容が含まれていたか」は、【ほぼ含まれていた】が 13 人、【大体含まれていた】が 5 人であった。(図 2)

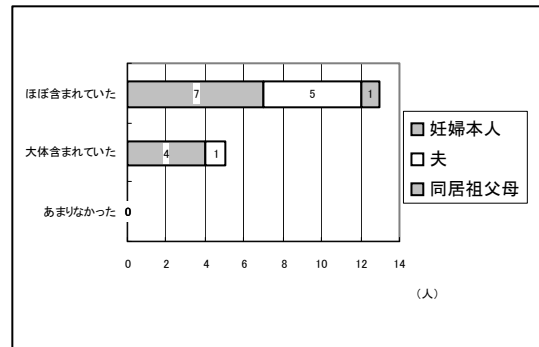


図 2. 知りたかった内容が含まれていたか (n=18)

⑥「将来、サークル活動に参加したいか」は、【参加したい】が 13 人、【特に考えていない】が 4 人であった。(図 3)

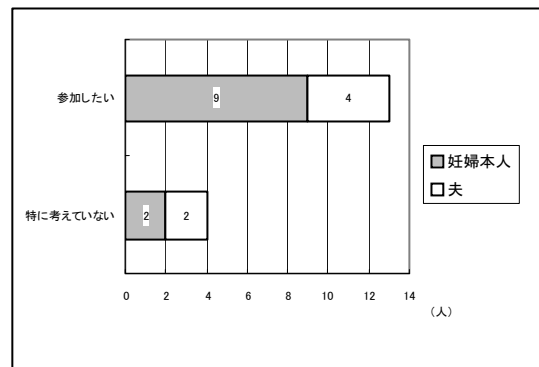


図 3. 将来、サークル活動に参加したいか (n=17)

⑦「夫以外の協力は得られるか」は、10 人の多胎妊婦が【得られる】と回答していた。また、協力できる人は誰かという質問には、義父母 2 人、実父母 3 人、両方 5 人と回答していた。(表 4, 5)

表 4. 夫以外の協力は得られるか (n=11)

妊婦本人	人
得られる	10
得られない	1

表 5. 協力できる人は誰か (n=10)

妊婦本人	人
義父母	2
実父母	3
実父母・義父母	5

⑧「多胎妊娠を知って感じたこと」は、妊婦本人、夫、同居祖母共に喜びと不安に関するものが多かった。(表 6)

表 6. 多胎妊娠を知って感じたこと (n=18)

(妊婦本人)
リスクが多いと聞いて不安ですが、単純にうれしい
嬉しいと思う前に、驚きと不安ばかりだった
周囲がとても喜んでくれる姿を見ると余計に不安になった
毎日無事に生まれて来てくれる事ばかり願っている
大変そうだなあと思った
すごくびっくりした(まさか自分が・・・)
大変だとは思ったが、将来的にひとりっ子ではないという事が安心だった
びっくり！というのが一番でした。うれしい反面、不安な気持ちも強かった
多胎と聞いてびっくり。色々情報を仕入れるにつれ、不安も混じってきた
(夫・同居祖母)
まず育てられるのかどうか不安。普通の子が産まれるかいまだに心配
うれしいけど大変かなあ？
うれしいのと冗談みたいな感じで笑いがこみ上げた
全てが分からない事ばかりでしたので、参加して良かった
ビックリした
喜びと不安

⑨「教室後の交流会についての意見・感想」は、参考になる話や生の声が聞けたなどプラスの意見が多くみられた。(表 7)

表 7. 教室後の交流会についての意見・感想 (n=18)

(妊婦本人)
産む前にいろいろな心がまえができて、とても良かった
インターネットや雑誌等では得られない情報が聞けて良かった
具体的な子育て話が聞く事ができて良かった
参考になる話がいろいろとあった
とても勉強になった
先輩ママやパパのお話が参考になった
こんな機会はめったにないので、すごく心強かった。とても楽しかった
双子のお母さんお父さん、専門の機関の方のお話でとても役に立った
(夫・同居祖母)
参考になり、勉強になった
なんとかかなりそうな気がした
体験された方の生の声が聞けてとても参考になった

⑩「行政やサークルへの意見・要望」は、改善点などが挙がっていた。(表 8)

表 8. 行政やサークルへの意見・要望 (n=17)

(妊婦本人)
末永いお付き合いなど交流
行政で出産について改善してほしい
妊娠、出産にも保健が適用されるようになってほしい
初めての出産なので、まだよく分からない
(夫)
双子の経済的支援制度
特にまだ考えていない
少子化対策に多胎出産へのメリットを加えて欲しい

2. 双子のママパパ教室後のフォローアップ

1) 調査方法および調査対象

教室に参加した多胎妊婦のうち2名に対して、教室参加の約6週間後に、それぞれアンケート調査と面接調査を行った。調査内容は、主に親族の支援に関するもので、その他、医療・行政サービスについてである。

2) 結果

属性については、表の通りである。(表 9)

表 9. 属性

	妊婦A	妊婦B
年齢(歳)	20代後半	30代後半
妊娠週数(週)	30週前半	20週後半
妊娠の種類	不妊治療	自然
分娩回数	初めて	初めて
家族構成	夫	夫
里帰り分娩	あり	あり
	(産前2ヶ月、産後1ヶ月)	(産後2-3ヶ月)
産後の手伝い	あり	あり
キーパーソン	夫・義母・友人	夫・実母・実姉

双子であるとわかった時の親族からの言葉として、嬉しかった言葉と、不愉快に感じた言葉の両方があった。また、妊娠中、不安に思ったことは、2名とも「あり」と答えており、「流産の危険性」「ハイリスク妊娠」を挙げていた。妊娠中の親族からの発言や援助で良かったことは、「双子の話題を聞いてきて教えてくれる」「考えすぎ、心配しすぎ、大丈夫と言われる」等であり、良くなかった発言は、「外出はだめ」「多少は動かないとね」「病気じゃないんだから動いても大丈夫」等であった。今後、親族へどのような援助を望むかという質問は、「こころの支え」「家事の手伝い」「赤ちゃんのお世話」等であった。医療・行政サービス、親族以外の援助で良かったことは、「サ

ークルや教室」であり、良くなかったことは、「双子は偶然？ときかれること」「双子を診てくれる病院が少ない」「双子の情報が少ない」等であった。今後、あればよいと思う医療・行政サービスは、「出かけやすい街作り」「多胎妊娠を管理できる病院や医師を増やす」等であった。それぞれの質問に対する詳しい回答については表 10 に示す。(表 10)

表 10. 質問の回答

質問項目	妊婦 A	妊婦 B
①双子だとわかった時の妊婦自身の気持ち	やったー 一度に二人も授かった	びっくりして、喜べなかった
②双子だとわかった時の親族からの嬉しかった言葉	実母：良かったね	夫：二人いっぺんに授かって良かった 夫の家族：双子が欲しかった
③双子だとわかった時の親族からの不愉快に感じた言葉	なし	実母：なんで双子なの？ 実姉：双子なんてうちの家系にはいない
④妊娠中に不安に思ったことはありますか？	初期：ハイリスク妊娠になること、流産のリスクが高いと聞いたため、安定するまで不安	初期：流産しないかどうか不安 一人が大きくならなかつたらどうしよう
⑤身体上のトラブルについて	出血、胆石の痛み 肝機能上昇	つわり、頭痛 鼠径部痛、腰痛、胃痛
⑥赤ちゃんのトラブルについて	なし	なし
⑦親族の発言や援助で良かったこと	夫：考えすぎ、心配しすぎ、大丈夫	夫：おなかが大きくなってから家事全般を手伝うようになってくれた 義父母：ベビーカーを借りてくれた 双子の情報提供
⑧親族の発言や援助で良くなかったこと	夫・祖母・義母：やっぱり多少は動かないとね	夫：初期は非協力的 冷たい時もあった 義父：病気ではないから大丈夫 親族：安静にしろと言われるのがストレス
⑨親族からの援助として望むこと	夫：心の支え、育児全般の協力、少しの家事 実母：里帰り中の家事 義母：健診の付き添い、買い物	親族：普段どおりでいい、気を遣ってほしい 実母：沐浴

質問項目	妊婦 A	妊婦 B
⑩医療施設や行政サービス、近隣者の発言や支援で役に立ったこと	双子サークルやママパパ教室で、先輩ママから妊娠中の色々なトラブルとか、言われても気にしなくていい事などが聞けたため、出血した時も落ち着いていられた	双子のサークル紹介 通院中の病院はほとんどが助産師なので色々話を聞いてくれる 友人：「ラッキーね」と言われたこと
⑪医療施設や行政サービス、近隣者の発言や支援で嫌だと感じたこと	「双子は偶然？」と聞かれること	友人：「二人は大変よ」「薬飲んだの？」「病院に通ってた？」と言われること 病院の対応：診察時間が短く、聞きにくい 多胎児に詳しい医師や管理可能な施設が少ない
⑫妊娠・育児中にあればいいと思う医療・行政サービス	沐浴の実践など、実感がわいていいと思う 双子のサークルは今から楽しみ	出かけやすい街作り 多胎妊娠を管理できる病院を増やす

IV. 看護実践の方法として改善できたこと

昨年までは、教室参加後のフォローアップが行われていなかったが、今回の結果より、妊娠期から育児期にかけて一連のフォローアップが必要であることがわかり、継続していくことの重要性が示唆された。

V. 現地側看護職者の受け止め

医療施設、行政、サークル、教育の協働により、様々な視点からサポートし、それぞれの担う役割と連携の大切さについて考えることができた。

VI. 考察

教室の開催について、保健センターからのチラシと病院で勧められた妊婦がほとんどであった。また、A市保健センターが、近隣の市の保健所にも呼びかけ、広域からの参加者もあった。このように、多胎児の数は増えていながらも岐阜県では、地域に数例あるかないかという状態であるため、それぞれの市での開催ではなく、広域への呼びかけによって対象者を集めることができ、より多くの妊婦が参加することができた。このように行政同士が情報を共有し、協力し合いながら支援を行っていくことが必要である。

また、調査結果から、教室へのニーズやサーク

ルへの期待が高いことが明らかになった。それぞれの職種が役割をもち、多様に対応するためにも、多職種が関わり合いながら、支援することが大切であると分かった。

多胎妊婦とその家族は、喜びと不安の中、妊娠期を過ごし、不安や問題を抱えながら育児期へ入ることも多い。できるだけ、不安や疑問をすぐに解決し、安心して妊娠期を過ごすことができるよう、サポートを行っていくことが重要である。そのためにも、教室の参加だけに留まらず、その後の妊娠期から育児期にかけて一連のサポートが必要である。今年度より、教室後の調査を行ったが、教室では得られない情報や、多胎妊婦の思いなどが明らかになった。今後も、継続した保健指導や相談を行い、個別に必要な場合や、ニーズがある場合は、すぐに対応できるようなシステムを作る必要がある。

Ⅶ. まとめ

1. 双子のママパパ教室は、妊婦とその家族にとって、情報を得るだけではなく、サークルから生の声を聞いたり、妊婦同士が話すことによって、悩みなどの共有を図ることができ、育児のイメージ作りに有効であった。
2. 教室後の調査によって、出産までのフォローと育児期にかけての一貫したサポートが必要であることがわかった。
3. 家族や行政・医療サービス、サークルなどのサポートが充実し、いつでも相談できる場があることによって、安心して妊娠期や育児期を送ることが重要である。

Ⅷ. 共同研究報告と討論の会での討議内容

1. 双子のパパママ教室開催について

教室開催のきっかけについて質問があった。この教室開催のきっかけは、サークルが病院訪問することから始まった。また、A市の保健師との連携もあったことや、サークルのメンバーの中に、保健推進委員がおり、ボランティアで支援を続けていた。その実績が認められたことと、行政と医療機関、サークルが取り組むことのできる環境が整っていたことで、大学側がサポートしながら始めることができた。また、この教室はA市に限定せず、広域の保健センターが協力して実施している。現在、A市のみが双子の教室を開催している。この教室は、多胎妊婦及びその家族からの需要が高く、他の地域でも開催されることが望まれるため、より多くの地域で取り組むことができるよう、

教室の必要性を多職種者に周知させ、協力していくことが必要である。

2. 双子のママパパ教室の周知について

参加していない人への対応について、話し合われた。入院している人や、教室に参加している人は良いが、参加できない人への支援が重要である。母子健康手帳配布時に、多胎妊娠テキストやパンフレットを配布したり、病院の外来にパンフレットを設置するなど、できるだけ目に触れる機会を設けることが必要である。

3. 妊娠中からの関わりの必要性について

去年は、教室後の支援に取り組むことができなかったが、今年度より、教室後の支援を妊娠期～育児期にかけて行うことが必要であると考え、アンケート調査および面接調査を行った。教室では、正しい知識を得たり、育児のイメージを持つことができるが、十分気持ちを吐き出すことができなかつたり、教室後に疑問点が出て不安になることもある。よって、問題をすぐ解決できるよう、いつでも相談できる場を提供したり、常に支援してくれる人がいるという安心感を持つことができるよう、支援していくことが必要である。

4. 多胎妊婦とその家族を支援していくための病院と地域の連携について

A市では、多胎の本を図書館に置き情報提供を行っている。また、他の市では、双子の出産後の集いを行っており、参加を望む人も多い。行政だけではなく、母親同士がO B的な役割を担いながら行えるようにし、情報交換を行う必要がある。また、多胎妊婦の不安は多いため、病院と連携を取り、正しい情報提供を行うことが大切である。地域での多胎児支援はまだ少ないが、ニーズは年々高まっている。多職種が専門分野を持ち寄り、補いながら、多胎妊婦とその家族を多方面から支援していく必要がある。

文献

- 1) 財団法人母子衛生研究会：単産-複産（複産の種類）別にみた年次別分娩件数及び割合（平成7年～平成16年）、母性保健の主な統計、母子保健事業団；58, 2005.
- 2) 前掲1)
- 3) 前掲1) 59.
- 4) 服部律子：乳時期の双子を持つ母親に関する分析と考察～育児の大変さとその支援について～、ペリネイタルケア, 21 (8)；78-84, 2002.
- 5) 藤原由美子, 藤原由美, 須山由梨子：多胎

児をもつ母親の育児に関する産前・産後の
悩み事-子育て中の母親の意見から-, 日本
看護学会論文集母性看護, 35 ; 137-139,
2004.

- 6) 尾前沙織, 谷尚子, 安代晋吾, 他: 双生児を
育てる母親の生活実態の検討, 藍野学院紀要,
19 ; 59-66, 2006.
- 7) 芦田慎子, 原田由紀: 双胎の育児をする母親
を支える要因-双胎と単胎の母親に対するア
ンケート調査を比較して-, 日本看護学会論
文集母性看護, 35 ; 134-136, 2004.
- 8) 服部律子, 布原佳奈, 名和文香: 地域にお
ける行政と育児サークルが協働で行う多
胎児支援, 岐阜県立看護大学紀要, 7 (1) ;
29-35, 2006.